

児童生徒が

生き生きと学ぶ姿を目指した授業づくり

(1年次/2年計画)



秋田県立栗田支援学校

令和7年度 研究報告

研究テーマ

児童生徒が生き生きと学ぶ姿を目指した授業づくり (1年次/2年計画)

研究テーマ設定理由

本校の現状から

学年集団が大きく、多様な学習集団の中で様々な学習活動を展開できる

児童生徒が抱える困難さが多様化しており、学習活動の設定に難しさがある

職員数の多さから、職員間での授業の意図が伝わりづらく、ねらいや手立ての共有が難しい

これまでの研究から

個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を踏まえた授業づくりのポイントの明確化

学びの必然性と学びによる達成感の重要性

多様な視点から捉えた児童生徒理解

研究仮説

的確な実態把握に基づき、児童生徒観、題材観、指導観の流れで授業を捉えることが

授業の意図の明確化と授業者間の共通理解につながり

児童生徒一人一人にとって分かりやすく学びやすい学習環境を生み出し

児童生徒が生き生きと学ぶ姿へ

1年次の内容と方法

児童生徒観、題材観、指導観の流れで授業を捉えるために、以下の①～⑤を段階的に進める。

研究部がコーディネーターとなり、チームとして授業を考えていく

① 児童生徒の思いや願いを含めた実態把握の充実

児童生徒の興味・関心、思いや願いを把握するため、学部に応じた様式や方法を検討する

② 児童生徒の実態の整理と捉え直し

抽出児童生徒について、自立活動の6区分27項目を意識して、複数の職員で実態を再整理する

事前検討会で以下③、④について、検討・共有する

③ 「何を学ぶか」の明確化

この学習で何を学ぶのか、学習指導要領の目標と内容を指導者で確認・共有する
単元・題材目標、本時のねらい、めあてとまとめに整合性があるか検討する

④ 教材研究の充実と、児童生徒にとって必然性のある学習活動の検討

児童生徒が「やりたい」「知りたい」と思える教材であるかを吟味する

⑤ 児童生徒の具体的な姿に基づいた学びの評価の実践

学部に応じた評価方法を検討し、学部授業研究会や学年会を活用して評価を積み重ねる

児童が「できた」という達成感を味わい 自ら学習に取り組む姿を目指して

学部研究テーマ設定理由

昨年度の研究から

児童のやりたいという気持ちと
教師が育てたい力とをすり合わせた学習活動

+

「自分で」「自分たちで」「誰かのために」
のキーワードで支援方法を整理

○成果 指導の妥当性が向上し、児童の主体的な姿を引き出した。

▲課題 達成感を十分に感じられるように、「できた」の経験をたくさん積む。
「できた」の実感を得られるように、児童にとって分かりやすいゴールを設定する。

児童の実態

経験したことや
繰り返しなどで
見通しをもった
活動には、自分
から取り組むこ
とができる。

学習活動の設定

児童の思いや願い
詳細な実態把握

教師が育てたい力

授業づくりの工夫

ゴールを明確にした「少し
頑張ればできる活動」の設定

児童の学びの価値付け

小学部の目指す姿

「できた」という
達成感を味わい、
自ら学習に取り組
む姿

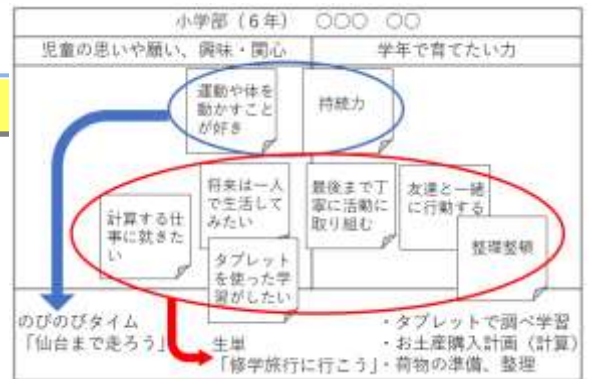
学部の取組

①児童の思いや願いを含めた実態把握の充実と指導内容の検討

- 児童の思いや願い、興味関心と教師が育てたい力とをすり合わせて指導内容を検討し「何をどのように学ぶか」を明らかにした。
- 児童の行動の背景にある困り感や困難さ、障害特性について複数の教師で自立活動の視点で整理し、児童理解を深めた。

②児童が達成感を十分に味わうための授業づくりの工夫

- 児童の詳細な実態把握を基に「児童が目標を達成する具体的な姿」を教師間で共有し、児童にとって「少し頑張ればできる活動」、「分かりやすいゴールの提示の仕方」を検討した。



授業の実際

第2学年 遊びの指導 題材名「わくわくすいぞくかん」

<主なねらいと学習活動>

「自分の好きなコーナーを選んだり、教師の誘いを受けたりして、時間いっぱい遊ぶ」「教師や友達と一緒に、ミッションをクリアしたり、悪者をやっつけたりする」をねらいとし、水族館をテーマにした遊びの中で自分で好きなコーナーを選びダイナミックに体を動かしたり友達と一緒に遊びやミッションに取り組んだりした。



<事前授業検討>

- コーナーで遊ぶとシールを獲得できるなどの報奨があってもよい。
- 「達成感の共有」「必然性のある活動」のために、ミッションを「全員でやっつけないとワニが倒れない」という設定にしてはどうか。

【←取組②】

<効果的だった取組>

- 児童の興味・関心が反映された遊びで、どの児童も好きなコーナーで時間いっぱい遊んでいた。複数人で乗れる乗り物や一緒に魚を釣り上げるなど自然に友達と関わる遊びを設定したことで、特定の友達のみと強引に関わっていた児童が、いろいろな友達を誘うようになるなど変容が見られた。【←取組①】
- 友達と協力して行うミッションのため、自分から友達を誘って参加していた。授業終了後、うまく遊べなかったと自分で感じた児童が「次はもっと〇〇する」と教師に伝えた。【←取組②】



第3学年 生活単元学習 単元名「さんさんしあたーⅡ～ぞうくんのさんぽ～」

<主なねらいと学習活動>

「劇の流れに沿って、大きな声で自分の役のせりふを話したり、大きな動きで表現したりする」をねらいとし、絵本「ぞうくんのさんぽ」に登場する動物たちの役を演じたり友達とやり取りしたりする劇遊びを行う。本時は3グループに分かれて練習し、最後にその成果を発表し合う活動を行った。



<事前授業検討>

- ・めあてを提示する際には動画や写真を活用し児童に分かる表現で伝えるようにしたい。【←取組②】
- ・お互いの発表を見合う際には「見る視点」があると、児童が互いを評価できるのではないかと。

<授業で効果的だった取組>

- ・劇が分かりやすいせりふと動きで構成されており、それぞれの児童が自分の動物の役割が分かって、主体的に取り組んでいた。繰り返しの練習により、自信がないことには消極的になりがちな言語不明瞭の児童が、自信をもって相手に聞き取りやすい声で話すことができた。【←取組①②】
 - ・発表のポイントがイラストと文字で具体的に提示されており、児童が「何を頑張ればよいか」「どこに注目すればよいか」が分かりやすかった。【←取組②】
- 児童が友達を「〇〇さんのせりふが上手」と具体的に評価し、褒められた児童はうれしそうにしていた。



今年度の成果

ゴールを明確にした「少し頑張ればできる活動」の設定

- ・児童の思いや願い、興味・関心と教師が育てたいと考える力をすり合わせて指導内容を検討し、児童の詳細な実態把握を基に、児童の「できること、できつつあること、難しいこと」や「できる環境」を明らかにし、「少し頑張ればできる活動」を設定した。興味・関心が反映され、また児童に応じた難易度が設定された学習活動により、児童の意欲が喚起され主体的に活動に取り組もうとする姿を引き出すことができた。【←取組①②】
- ・本時のめあてや活動について動画や写真、イラストを活用したことで、児童にとって「今日頑張ること」を分かりやすく提示することができた。【←取組②】

児童の学びの価値付け

- ・2年生の遊びでは「コーナーで遊んだ児童にシールやパズルのピースを与える」、3年生の生単では「発表後すぐにT1が児童の様子を具体的に称賛する」と、教師による即時評価が児童の意欲喚起に有効だった。またシールが増えたりパズルが出来上がったりと、児童の頑張りが積み重ねられていく様子を視覚的に示すことで児童が自発的に遊びに向かう様子が見られた。【←取組②】
- ・3年生の発表で「注目ポイント」を示したことで、自分が頑張るポイントを児童が理解できただけでなく、児童が友達を具体的に評価することができた。称賛された児童の意欲喚起や次時の活動への期待感につながった。

次年度に向けて

児童が「できた」と自分の学びを実感できる授業づくり

- ・児童が達成感を得て活動を終えるためには、活動の結果だけでなく、活動の過程（活動に取り組む姿）を教師が認めることが大切である。児童の頑張りを教師が認めることで、「次はもっと頑張る」という意欲や次時への期待感が高まる。
- ・「今日の学習のゴール」と、それを評価する具体的なポイント（評価規準）を教師と児童で共有する。教師からの評価や自己評価だけでなく、友達からの評価という仲間からの価値付けにより、学びの実感を高めていく。
- ・「友だちと一緒にミッションを達成できた」、「自分の頑張りを友達に認めてもらえた」という経験が活動への満足感や達成感、次時への期待感につながる姿が見られたことから、活動内容やグルーピング等を工夫し、友達との関わりを通した学びが実現できるようにしていく。

生徒が目的をもって自ら学びに向かう姿を目指して

学部研究テーマ設定理由

＜昨年度の研究から＞ 生徒が学びを実感し、自ら考えたり、行動したりする姿を目指して

成果

- ・本時の学びを明確にしたことで、学習の成果に手応えを感じ、進んで学習する様子が見られた。

課題

- ・長期的な視点で過去の自分と現在の自分を比較できるような工夫が必要である。

＜生徒の実態から＞

- ・自信や目的意識の乏しさから、学習に対して受け身な姿勢で取り組む生徒が見られる。
- ・自分の頑張りや成長に気付けなかったり、肯定的に認められなかったりする生徒が見られる。

＜目指す姿＞

- ・「こうなりたい」「こんなことができるようになりたい」という気持ちを持ち、その実現に向けて主体的に学習に取り組む姿を目指す。

学部の取組

①生徒のニーズの把握

- ・生徒の思いや願いを把握するため個別面談を実施する。
- ・好きなことや苦手なこと、今後の目標や進路などを話題にし、授業づくりの参考にする。



②学習の成果の見える化

- ・自分の学習の軌跡を振り返るツールとして「中学部のみちしるべ」(キャリアノート)を作成し、主要な学習の振り返りシートなどを時系列にまとめる。



③実態の捉え直し

- ・各学年1名ずつ対象生徒を設定し、自立活動の視点から実態を再整理する。
- ・指導すべき課題と学習場面で必要な支援を具体化する。



研究対象授業：生活単元学習（進路学習）

授業の実際

3年 進路学習Cグループ 単元名「中3おたすけ社」

＜主なねらいと学習活動＞

校内の職員の依頼を受けて清掃などを行う「働く編」と、友達と会食やゲームを楽しむ「楽しむ編」の活動から構成する。自分でできる役割や経験を増やし、進んで活動に取り組む姿を目指す。

＜事前授業検討＞

- ・これまでの学習の振り返りを通して、今まで取り組んできた「おたすけ社」の活動を今後もみんなで頑張りたいという思いや、みんなでお楽しみ会をしたいという願いをもっていることが分かった。（←取組①、取組②）

＜効果的だった取組＞

- ・「働く編」と「楽しむ編」の繰り返しからなる発展的な単元設定
→ 学習への見通し、期待感、意欲
- ・生徒の思いや願いと教師のねらいを踏まえた余暇活動という題材の設定（←取組①）
→ 「みんなで楽しむ」という目的に向かって主体的に活動する姿
- ・対象生徒が安心して活動できるグルーピングや対象生徒の課題に応じた活動設定（←取組③）
→ 友達を受け入れたり、友達を手伝ったりする姿



＜今後に向けて＞

- ・現在教師が担っている役割を少しずつ生徒に任せて、活動量を増やす。
- ・本時のめあてを想起できるような発問や視覚的な支援を行ってから、写真で取組の様子を振り返る。

2年 進路学習Aグループ 単元名「しごと体験～もっと知ろう！しごと、じぶん～」

<主なねらいと学習活動>

- ・ 高等部総合サービス科の三つの専門教科に関わる仕事を実際に体験する。仕事体験を通して、仕事に興味をもったり、「やってみたい」「もっと知りたい」という気持ちをもったりして、今後の進路選択に意欲的に向かう姿を目指す。本時は車椅子介助の仕事を題材とした。

<事前授業検討>

- ・ 生徒のほとんどが将来働いて生活していきたいという希望をもっているが、自分のできるだろうかという不安を感じているということが分かった。(←取組①)
- ・ 接客、掃除、介護の三つの仕事をそれぞれ複数回ずつ体験できるように単元を構成し、毎時間の活動の記録を残すことで少しずつステップアップしていることが実感できるようにする。(←取組②)



<効果的だった取組>

- ・ 試行錯誤しながら繰り返し体験に取り組める活動設定 → 改善点を意識して次の活動に向かう姿
- ・ 対象生徒が安心して活動できるペアの設定 (←取組③) → 気付いたことを自分から友達に伝える姿
- ・ ポイントを絞った教師の発問 → 自分の考えを発表する姿

<今後に向けて>

- ・ 介助される利用者の気持ちについて深く考えられるような活動の工夫や発問などがあるとよい。
- ・ もう少しねらいを焦点化し、生徒の思考の過程を視覚的に残していく。

今年度の成果

生徒の思いや願いを反映させた授業づくり

個別面談で明らかになった生徒の思いや願いなどを参考に授業づくりを行った。生徒の関心に沿った題材設定や、生徒の実態に合わせた発展的な単元設定などが有効であり、目的をもって主体的に学習に向かう姿が見られた。また、実態の捉え直しで整理した対象生徒の課題に応じた学習活動を設定し、授業実践を重ねたことで対象生徒の変容が見られた。

「中学部のみちしるべ」を活用した主体的な学びの循環

「中学部のみちしるべ」を作成し、個別面談や、学期ごとの振り返りの際に自分の学習の軌跡を見返せるようにした。目標としていたことがどうだったのかを教師とともに振り返り、新たな目標や学びにつなげるという主体的な学びの循環が図られた。

次年度に向けて

個別面談及び「中学部のみちしるべ」の活用の継続

生徒の思いや願いを把握するための個別面談を継続し、学習の振り返りや新たな目標設定の場としても活用していく。「中学部のみちしるべ」は中学部3年間の学びを蓄積し、長期的な振り返りのツールとして活用する。

ねらいの焦点化と活動量の確保

授業のねらいを焦点化し、生徒がめあてを想起できるような発問の仕方やめあてにせまるためのまとめについて具体的に検討する。また、活動量が十分に確保されているか、生徒が思考を深めるための場面設定と手立ては十分であるかという視点で授業を見直していく。

他者のために主体的に行動する姿勢を育むための授業づくり

中学部段階における進路学習では、他者のために主体的に行動する姿勢を育成することが重要であるという意見が多く挙げられた。他者や集団のために役割を果たす経験や感謝される体験、成功体験の積み重ねなどを通して、主体的に行動する姿勢を育む授業づくりを目指していきたい。

課題解決に向けて周囲の人やものに働き掛けながら、 よりよい答えを見付け出そうとする姿を目指して

学科研究テーマ設定理由

<昨年度の研究から>互いに学び合い、自分や他者の考えに気付き行動する姿を目指して

成果 興味・関心に即したグルーピングにより、自発的なやりとりの増加

課題 めあてに迫る学習方法やまとめ方の提示や方向性の確認

<生徒の実態から>

- ・働くことや将来の生活に対して期待感やなりたい姿をイメージできている生徒がいる。
- ・学習する前から分からない、できないと判断して意欲が低下したり、学習に向かえなかつたりする生徒がいる。

<目指す姿>

自分自身や周りの人と対話しながら、自分への気付きや自分に合う学び方を見付けていく過程で、目の前の課題に興味・関心を持ち、課題解決に向けて周囲の人やものに働き掛けながらよりよい答えを見付け出そうとする姿

学科の取組

①生徒の願いや思いの把握

- ・個別面談
(対象生徒を中心に対話と定期的な評価)
- ・ワンステップシート
(生徒の等身大の願いや思いを把握)

研究対象授業：職業科

②実態の捉え直し

- ・学年会での情報共有
(対象生徒の変容の見取りと背景の分析)
- ・コース別の意見交換
(縦割りグループでの職業科で求めたい力、指導内容を検討)

③授業のポイントの整理

- ・単元プランニングシート
(ねらいの達成に向けた学習活動の計画)
- ・授業構想シート
(学び方に応じた支援方法、手立てと配慮の検討)

授業の実際

2年 職業科Bグループ 題材名「自分をステップアップ～もやもやを解決しよう～」

<主なねらいと学習活動>

現場実習で体験した困りごと（もやもや）の解決策や改善策を考えることをねらいとした。本時ではコミュニケーション面でのもやもやしたことを書き出し、互いに解決策や改善策を考え、その中から自分に合う方法を見付ける活動をした。

<事前授業検討>

- ・1時間ごとに取り上げる困りごとを、作業面や対人面などのジャンルに分けて提示することで、解決策や改善策の方向性などの気付きが生まれるのではないか。(←取組③)
- ・自分の意見をまとめる際には対象生徒が取り組みやすいように付箋紙にキーワードを書く、教師が代筆するなどの方法を提示して生徒が自分に合う方法を選択できるとよいのではないか。(←取組②)

<効果的だった取組>

- ・生徒全員が体験したことを取り入れた題材設定(取組①)→課題意識の芽生え
- ・グルーピングの工夫と教師の配置(取組②)→協働的な活動の充実
- ・友達や身近な教師からの解決策の提案→自己選択の機会と自分への還元



<今後に向けて>

- ・実習先からの評価など、社会的な視点を踏まえた職業観を育成するための題材設定
- ・目指す生徒像の姿の明確化とそれに応じたねらいの焦点化と設定
- ・生徒の得意やよさを取り入れた体験的な方法の検討（ロールプレイなど）





＜主なねらいと学習活動＞

高等部卒業後の生活の場の選択肢として挙げられる一人暮らし、実家やグループホームでの生活で必要な力や特徴を比較した。卒業後の生活に向けて今後どのような力を付けていきたいかを考えることをねらいとした。本時では、グループホームの見学の様子を振り返り、必要な力や特徴を考えた。

＜事前授業検討＞

- ・三つの生活の場で必要だと思われる力や特徴について、生徒から様々挙げられると思うが学習に必要な項目を提示しておくとのよいのではないか。(←取組③)
- ・生徒の家庭環境が多様化しており、一人一人がもつ家庭生活のイメージが異なる。共通認識がもてるように家庭生活について話し合ったり、調べたりする時間を設定したらよいのではないかと。(←取組②)

＜効果的だった取り組み＞

- ・生徒の知りたい内容を反映した単元設定(取組①)→意欲の喚起と主体的な姿の実現
- ・コの字型の座席配置、肯定的な教師のフィードバック(取組②)→安心できる学習環境の設定や集団形成
- ・動画での見学の振り返りと気付きの共有→グループ活動に向けた情報の共有

＜今後に向けて＞

- ・効果的な学びに結び付けるための学習時期と指導段階の検討とレディネスの形成
- ・学習に必要な情報の整理・精選と、思考に必要な発言やキーワードを記録と視覚情報の提示
- ・個で思考する時間の確保と協働的な活動での話し合いの進め方や役割分担の明確化



今年度の成果

生徒の思いや願いを大切に授業づくり

生徒の思いや願いを単元や題材に取り入れたことで、学習への意欲を喚起し、主体的に学習に向かう姿が見られた。また不安や苦手なことに対する支援や手立てについては、自立活動の視点で再整理した実態を基に、本人の得意なことを含む様々な手立てを準備したことで、生徒自身ができそうな方法を選び、教師や友達と関わりながら、課題解決に向けて学習活動に臨むことができた。

授業づくりの視点の明確化

単元プランニングシートや授業構想シートを活用したことで授業づくりに必要な要素を集積し、学習活動や手立てや配慮について授業者間で意見を出し合ったり、整理したりしながら授業を考えることができた。また、学年会の他に学習グループ毎の職員で各段階に応じた求めたい資質や能力、単元計画や各時間の授業づくりについて意見交換する機会を設定した。各学年や学習グループに応じた必要な指導内容や適した指導時期など、3年間を見通して整理し、単元を計画することができた。

次年度に向けて

実態把握の項目選定と活用に向けての仕組みづくり

今後も学習への期待感や意欲を喚起するために、生徒の思いや願いを取り入れた授業づくりをしていく。そのためにワンステップシート中の項目の見直しや活用時期や方法を検討していく。生徒の思いや願いの把握の際には、単元や学期毎などの短期的な願い、卒業後を見通した長期的な願いそれぞれに応じた項目を選定したり、適した個別面談の時期を設定したりしていく。また、これらの情報を個別の教育支援計画の作成、評価も際にも活用し、関係者で共通理解を図っていきけるようにしていく。

めざす姿に近づくためのねらいの検討

授業でめざす生徒の姿を具体的にイメージし、ねらいを焦点化させていく。現在活用している授業構想シートの学習活動の欄に、ねらいに沿った生徒の思考や行動を予想して記載する項目を設定したり、教材観の欄を追記して学習指導要領の目標と教師の願いを記載する項目を設定したりする。生徒が何を学ぶか、どのような姿を育てていきたいかを明確にしながらか授業づくりを行っていく。

生徒が自己理解を深め、なりたい自分に向かって行動する姿を目指して

学科研究テーマ設定理由

＜昨年度の研究から＞ 自ら気づき、考え、学びを表現する姿を目指して

成果

- 学習の目的「なぜ何のために」が明確になった
- 異学年の学び合いにより、気づきが生まれた
- 校内外の人材との連携で専門性が深まった

今後に向けて

- 生徒の目指す姿を明確にしたい
- 自分や相手のことを考える機会を増やしたい
- 異学年交流や外部講師との連携を継続したい

＜生徒の実態から＞

- ・全員が一般就労を希望し本学科に入学している。
- ・自分のよさや課題が曖昧だったり、自己評価と他者評価に差異があったりする。



＜道徳科の特徴から＞

- ・生徒が自らの将来を考え、自己実現をするための素地を育む教科である。
- ・昨年度の研究成果を特に生かすことができる教科であり、全学年が共通して取り組むことができる。

＜目指す姿＞

協働的な授業実践を積み重ね、生徒がよさや課題に気づき、将来の姿を具体的に考えることで目的や目標が明確になり、なりたい自分に向かって行動する姿を目指す。

学科の取組

研究対象授業を「道徳科」に設定し、以下の実践を重点に授業づくりを行った。

①生徒理解を目的とした各シートの活用



- ・目標達成シート
→生徒が記入し、なりたい自分像を明確化した。
- ・自立活動シート
→教師が記入し、生徒の困り感を明確化した。

②生徒の学び方の分析



- ・学び方アンケート
→生徒が記入し、得意な認知処理方法を把握した。
- ・授業の動画記録
→教師が振り返り、手立てや環境の工夫へ生かした。

③異学年の学び合い



- ・話し合い活動の積み重ね
- ・多様な見方、考え方に触れる機会の確保
→個人やグループの考えを廊下掲示して共有した。

④研修会の実施



講師からの助言

- ・道徳科の指導について
- ・ねらいの設定について
- ・教材の分析について
- ・道徳科の評価について

第1学年～第3学年 道徳科 題材名「相互理解・寛容 ～みんなちがって、みんないい～」

<主なねらいと学習活動>

本題材では、道徳科の内容項目「相互理解・寛容」を取り上げ、多様な価値観や考え方があることを知り、互いに尊重し合う気持ちを育むことを目指した。生徒が身近に経験したことをテーマや事例に取り上げ、登場人物の心情や背景などを推察したり意見交流したりすることを通して、物事を多面的・多角的に捉える思考を醸成していきたいと考え、本題材を設定した。

<事前授業検討>

- ・話し合いのテーマは答えがなく、中立性の高いものを考えていきたい。
- ・本時の振り返りシートと題材を通した振り返りシートを用意してはどうか。
- ・多様な見方、考え方をするためにディベート要素を取り入れてはどうか。



<授業協議>

協議から

- ・各シートの活用は生徒の本音を引き出す手立てとして有効だった。（←取組①）
- ・事例場面をイメージできるようにイラストを示したが、イラスト提示の仕方や場面の切り取り方によって生徒がもつイメージが変わるため、留意したい。



助言から

- ・小グループでのディベートは生徒の意見を引き出すよい機会となり、有効だった。
- ・言葉の表出が少ない生徒の思いをどのように引き出すか工夫する必要がある。
- ・生徒が意見交流をする際に気を付ける三つのポイントは、①テーマを狭めすぎない、②生徒の経験を引き出す発問、③生徒の心を揺さぶる教師の切り返しが大切である。



<効果的だった取組>

- ・テーマを生徒の実体験に基づいたものにしたことで、具体的なイメージをもちながら、自分の考えだけでなく他者の視点を取り入れながら思考していた。（←取組②、③）
- ・振り返りシートに授業で感じた感想や自分の意見を蓄積したことで、題材を通した生徒の変容が分かり、内面にある本心を可視化する一助となった。（←取組④）



今年度の成果

自己理解と他者理解の深まり

授業を通して、様々な視点で物事を考える力が育まれた。特に自分と違う意見に接する機会を通して、相手の気持ちや考え方を受け止め、自分の意見を深く考え直す機会となった。

生徒の内面に着目した指導の充実

道徳科の授業づくりを通して、生徒の内面に迫るための効果的な指導方法を理解した。ディベートや振り返りシートなどを活用したことで、生徒が自分と少しずつ向き合おうとする姿勢の変化が見られた。

次年度に向けて

生徒のよさや得意な学び方を生かした指導・支援の充実

生徒に学び方アンケートを実施したことで、自分の得意な認知処理方法について理解でき、生徒自身の自己理解にもつながった。生徒にとって最適な学び方を知ることで教師の伝え方が変わり、生徒への支援の質が高まった。今後もこの視点を大切に、手立てや環境設定の工夫に生かしていきたい。

生徒の心を揺さぶるやりとり（発問や切り返し）の充実

今年度の実践で生徒が思考するきっかけを教師が意図的に設定する大切さを感じた。今後も教師の問い掛けや切り返しの質を高め、学校生活全般において生徒の本音や本心を引き出すやりとりの充実を図っていききたい。

寄宿舎研究テーマ設定理由

<昨年度の研究から>

学んだことを自分の力として活用できる生徒の育成を目指した生活指導の実践

【成果と課題】

- 生徒が興味・関心をもって学びたいと考えている内容を取り入れた学習会や体験活動
- 生徒の実態や変容を捉える「生活記録」を活用した職員同士の指導の連携

<生徒の実態から>

- ・日常生活に関する経験不足な生徒
- ・自信がなく消極的な場面の多い生徒

<今年度の研究では>

生徒の「やりたい」「伝えたい」「こうなりたい」に着目した体験的な活動場面の設定と指導内容や方法の検討、評価を充実させることで、意欲や目的をもち、自ら活動に取り組む姿を目指す。

場面：自立生活実習

自立生活実習の内容とは？

(1) 宿泊体験：泊数は最長4泊5日

→一人暮らしを想定し、入浴時間や洗濯のタイミングなどを自分で考えて生活する。

(2) 時間体験：下校後から登校前までの時間の中で設定

→買い物や調理、掃除や洗濯などを集中的に取り組む。

取組の実際

①自立生活実習を通した体験的な活動場面の設定

【やりたい】目標をもち、達成に向けて考えたり、調べたりする機会を設定

- ・生徒の希望を基に、担当職員が育てたいと考える力を伸ばすことをねらいとして、活動内容を検討した。「〇〇先輩のようにこの活動に取り組みたい」など、身近な先輩をロールモデルとして意識し、活動へ前向きに取り組もうとする生徒が多く見られた。
- ・記録用紙の内容や構成を見直した。



【伝えたい】寄宿舎集会や学習会を活用した情報提供や活発な意見交換をする場面を設定

- ・寄宿舎集会の中で、実施した生徒が取組の内容や振り返り、取組の目的を発表する場を設けることで、目的意識の共有を図った。
- ・点呼の時間を活用して活動前後の発表を行ったり、取組の様子を掲示したりするなど、情報共有の場を設定した。生徒自身が家庭や学級担任に活動内容を詳しく伝える中で、意欲を示す言葉が多く聞かれた。



次はヒントがなくとも一人でもできるようにしたい！

【こうなりたい】実践してうまくいったことや課題について振り返り、今後どうしていきたいか、どうなりたいかを言語化する機会を設定

- ・学習会の中で、自分の取組の成果を伝えたり、他の寄宿舎生のよいところを見つけたりするなど、意見交換を行った。「〇〇先輩の話聞いて、次はもっとこうなりたい」など今後への意欲を示す発言が見られた。
- ・担当職員と振り返りの時間を設定し、生徒の自己評価と職員による他者評価を突き合わせて擦り合わせを行った。



②生徒の多角的な実態把握

- ・学部と連携し、抽出生徒の実態の整理と捉え直しの演習会や、学部授業研究会に参加しながら、情報共有を図った。生徒の的確な実態把握の方法や整理の仕方を参考にし、生活指導の手立て等について検討した。
- ・抽出生徒の生徒実態把握票（後期）については、全職員が記録に関わり、各職員の主観的な見取りを記入する形で作成した。複数の視点を集約することで、中心的な課題を探る手がかりを得るとともに、生徒理解の精度を高めることにつながった。今後は、この方法を他の寄宿舎生にも広げ、生徒理解の充実を図っていきたい。



③評価方法の充実

実践記録シートによる評価

- ・手立てや環境設定について担当間で話し合い、寄宿舎研究会で情報を確認した。
- ・生徒の取組について、生徒と職員が同じ視点で評価できるよう、3段階の評価基準を検討・設定した。評価基準を明確にすることで、評価の公平性や一貫性が保たれ、成長や変容を捉えやすくなった。

ショートミーティングによる評価

- ・ショートミーティングを定期的を実施し、抽出生徒を中心に手立てや変容、評価等について共有したことで、記録には表れにくい日常の細かな生徒の様子を職員間で把握することができた。

指導を見合う会での評価

- ・ICTを活用して「指導を見合う会」を寄宿舎宿直指導員とも実施し、抽出生徒の実態や現在取り組んでいる指導内容、手立てについて意見交換を行った。

今年度の成果

意欲をもって前向きに取り組もうとする姿

- ・生徒の意欲を引き出すことを大切にしながら、活動内容を相談して決めることができた。
- ・取組の様子を振り返る中で、「この活動に挑戦してみたい」「この活動なら卒業後も家庭で続けられそう」など、身近な先輩をロールモデルとして意識したり、やったことのない活動にも自ら挑戦しようとしたり、卒業後の生活をイメージしたりしながら、活動へ前向きに取り組もうとする生徒が多く見られた。

生徒の行動やその背景を多面的に整理した、生徒理解の充実

- ・授業参観を通して学校での生徒の実態をより深く把握することができ、今後の指導方法の見直しを図ることができた。
- ・学部職員に取組の様子を参観・共有してもらうことが生徒の励みとなり、意欲や自信へつながった。
- ・ショートミーティングを計画的に実施したことで、話し合いが活発になっただけでなく、今後の効果的な指導方法について検討し、共通理解を図ることができた。
- ・実践記録シートを活用することで生徒の様子や変容、評価を一目で把握でき、有効であった。
- ・ICTを活用したことで、担当以外の職員も評価に関わることが可能となり、棟や性別にとらわれない記録体制が構築された。その結果、多様な視点が生活記録等に反映され、生徒の行動や背景を多面的に捉え、生徒理解を深めることができた。

次年度に向けて

評価の視点の共有

- ・室会や学習会を活用し、生徒同士で取組について発表したり意見交換を行ったりしながら、自らの活動を振り返る機会を設定する。
- ・生徒や職員からの他者評価の機会を設け、取組や評価を共有できるよう、付箋紙を活用した掲示も取り入れていく。
- ・職員間で活動の目標やねらいを確認した上で指導内容を明確にし、共通の視点をもって生徒の姿を見取り、記録・共有する力を高めていく。

①児童生徒の思いや願いを含めた実態把握の充実

児童生徒の思いや願いを含めた内面の理解を深めるために

- ・(小学部)職員で児童の内面の見取りを伝え合う機会の設定
- ・(中学部)生徒の思いを聞いたり、学びを深めたりすることを目的とした個別面談の定期的な実施
- ・(高等部)生徒本人が、自分の目標や学びたいこと等を記入するシートの活用
- ・(寄宿舎)生徒の願いを踏まえ、生徒と共に自立生活実習の内容選定をする機会の設定

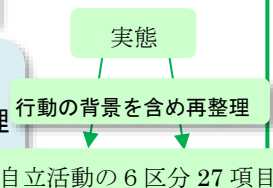


自立生活実習の内容を生徒の願いを聞きながら話し合う様子(寄宿舎)

②児童生徒の実態の整理と捉え直し

児童生徒の行動の背景を含めた多面的な実態把握のために

- ・各学部で対象児童生徒を抽出し、自立活動の6区分27項目を意識して実態を再整理
- ・複数の職員で児童生徒の実態について、行動の背景を含めて話し合う機会の設定



③授業者同士で授業の意図を検討・共有することを目的とした事前検討会の実施

授業者が授業づくりを段階的に考えていけるように

- ・児童生徒の思いや願いを含めた実態や対象児童生徒の再整理した実態を基に、児童生徒観について授業者同士で共有
- ・単元構想シート等を活用し、題材選定の理由、単元計画や単元目標について話し合い、この授業でどんな力を、どのような理由で育てたいのかを整理



研究部がコーディネーターとなった事前検討会の様子

④児童生徒の具体的な姿に基づいた学びの評価の実施

- ・学年会や職員アンケートを活用し、対象児童生徒の学びについて単元毎に評価
- ・(舎)ショートミーティングを定期的実施し、対象生徒の変容を職員同士で共有

手本としてKさんに注目していた。(授業)
学級で周囲の人を見て、真似して活動しようとするものが増えた。

1年次の成果

児童生徒の思いや願いを反映した授業づくり

- ・児童生徒の内面の理解を深め、多面的に実態を把握したことで、「やりたい」「知りたい」という思いを起点にした主体的に取り組める授業を構想することへとつながった。

児童生徒の学びを価値付ける視点の共有

- ・事前検討会で職員同士が授業の意図を言語化し、共有する方法が、児童生徒一人一人の学びを価値付けるための評価の視点を明確にすることへとつながった。

2年次に向けて

今年度の実態把握のための取組を、個別の教育資料作成の手順の中に位置付ける

- ・今年度取り組んだ実態把握の方法を、個別の教育資料作成の手順の中に明確に位置付け、指導の根拠として活用し、日々の授業づくりにつなげていけるようにしたい。

授業の評価の観点を明確にし、ねらいやめあてに沿った指導及び支援の工夫を図る

- ・授業で何を評価するのか、個々の児童生徒がねらいを達成した姿はどんな姿か、授業の評価の観点を3段階程度で示すことで、ねらいを明確にし、ねらいやめあてに即した指導・支援の工夫につなげていけるようにしたい。



令和7年度 研究報告

発行年月

令和8年3月発行

発行所

秋田県立栗田支援学校

〒010-1621 秋田市新屋栗田町 10-10

TEL 018-828-1162

018-888-8171 (第2校舎)

018-828-1170 (寄宿舍)

FAX 018-828-4720

ホームページ <http://www.kurita-s.akita-pref.ed.jp/>

メールアドレス kurita-s@akita-pref.ed.jp

